

■ 藺田 郁「近代日本の大衆演芸ジャンルにおける興行史研究—西日本を中心に」

本年度は上記の研究課題に基づき、主に浪花節芝居(節劇)の興行活動に関する調査を進め、並行して源氏節女芝居および活動人形に関する調査を行った。前年度に続きコロナ禍による外出自粛により、現地調査が十分に出来なかったが、可能な範囲で実施し、併せて文献資料による調査を行った。

浪花節芝居に関する研究は、特に西日本を中心とした浪花節芝居の上演実態を解明するために、基本資料を元に長期的な興行活動の解明を進めた。前年度から継続する作業として「近代歌舞伎年表」における主要都市部(大阪、京都、名古屋)の興行状況の調査(明治期から昭和初期)を行い、またその他の西日本地域(九州、四国)についても興行記録の調査を行った。関連するジャンルである俄芝居や音曲萬歳については、主に文献資料を元に演者の活動状況を詳細に追うことで、浪花節芝居との具体的な繋がりに関する貴重な情報をいくつか得ることができた。一方、現地調査では、島根県浜田市金城町久佐に伝承される山陰久佐松竹座の活動を取材した。この一座は商業的な大衆演劇をのぞくと、現在唯一の浪花節芝居が伝承される座である。残念ながら予定されていた公演は中止となったものの、保存会のメンバーに聞き取り調査を行い、また山陰松竹座に残された資料、台本、映像資料などを収集することができた。これらの一次資料と文献で得られた情報をもとに、浪花節芝居(節劇)の上演形態についての考察を進めた。

活動人形は、前年から実施している文献資料に基づく調査を行い、上演形態に関わる貴重な情報をあらたに収集することができた。また外地(台湾・満州)の興行記録については、植民地で開催された博覧会に焦点を当てた口頭報告を行った(2022年以降に論考を発表予定)。源氏節はこれまで収集できた音源資料お

よび文献資料に基づいて源氏節女芝居の上演形態の解明を進め、これらの成果の一部を論考として纏めた(2022年発行予定)。

◆関連する執筆

- * 2021.5『伝統文化 資料編(はじめて学ぶ芸術の教科書)』、京都芸術大学 東北芸術工科大学 出版局 藝術学舎、第三章担当、pp.43-62。
- * 2021.12「琵琶法師 山鹿良之」大阪日日新聞、2021年12月14日付。

◆関連する口頭発表

- * 2021.08.31「日本統治下の台湾における大衆演芸の興行—タカマチとしての博覧会—」、科学研究費助成事業「日本統治下の台湾における歌舞伎・浄瑠璃史の構築——現地資料に基づく基礎研究と考察——」共同研究会、オンライン。
- * 2021.10.16「義太夫節のなりたち—語り芸の真髄に触れてみる」、「現代日本演劇のルーツシリーズ講座編 古典音楽について学んでみよう」、布施 PE ベース。

◆その他

- * 2022.03.13 HMP シアターカンパニー〈現代日本演劇のルーツX〉音楽劇『堀川、波のつづみ』(トークゲスト)

◆講義・講座

- * 2020.04-2021.03 日本伝統音楽演習 d I・II・III・IV
- * 2022.1.20 令和3年度第4回伝音セミナー「曲(芸)弾を聴く」、日本伝統音楽研究センター

◆資料・調査

- * 2021.11.20 島根県浜田市金城町久佐 山陰久佐松竹座に係わる資料調査

◆対外活動

- * 2021.04-2021.03 大阪音楽大学 非常勤助手
- * 2021.04-2022.03 大阪大学大学院文学研究科 特任研究員
- * 2021.04-2021.09 神戸大学 非常勤講師
- * 2021.09-2022.03 畿央大学 非常勤講師
- * 2021.09-2022.03 大阪教育大学 非常勤講師

■ 出口 実紀「近世雅楽譜の唱歌と記譜の系統に関する研究」

これまで扱ってきた近世の筆楽譜および笛譜について、今年度は唐楽八十八曲を対象に比較・考察をおこなった。昨年度までの研究で、天王寺方の譜については①唱歌の表記で「利」、「里」という漢字表記がみられること、②本譜は指孔と音名を表記する譜に分類でき、先ほどの「利」と表記する楽譜では音名表記が

用いられること、③旋律は同じであるが唱歌のパターンが複数みられる、といったことを指摘した。また③唱歌のパターンについては、本家・分家による違いと位置づけた。今回、比較対象を唐楽八十八曲に広げたことで、唱歌だけでなく奏法の特徴や傾向についても二通りの系統が確認でき、家筋については天王寺方楽家の中で天王寺に居住する「在天」、京都に居住する「在京」という視点で再検討したところ、「利」を使用する譜の系統はいずれも在天楽家の譜であることが明らかとなった。一方、「里」を用いる譜の系統については、在京東儀家にみられる表記であるものの、在京岡家の譜が「里」を用いていないことから、現時点では「在京」の記譜と断定はできず、今後さらに検討が必要である。また今年度より、中世に成立した『龍笛要録譜』をはじめ、『懐中譜』、『基政笛譜』等の大神家の笛譜に関する研究を開始し、中世から近世に至る笛譜の変遷についての研究を継続中である。

民俗芸能における研究活動では、岐阜県、和歌山県において祭礼の調査委員および調査員を務め、和歌山県の御坊祭については獅子舞の音楽に関する原稿を執筆し、報告書が刊行予定である。また岐阜県の太鼓踊りに関する成果として鈴木由喜子氏と共著で研究ノートを執筆した。岐阜県揖斐郡揖斐川町では複数の地区で太鼓踊りが伝承されているが、中でも一部の地区では「ザイフリ（またはザイ）」や「梵天」といった踊り手の先頭に立って指揮をする役が付く。そこでザイフリ・梵天をもつ地区では、芸態の共通性以外に踊り歌の構成や音楽的要素に共通性が見出せるのか考察を試みた。その結果、これらの地域は「ツボ」および「ハネ歌」という音楽的特徴をもち、ハネ歌の伝承がみられない地区でも、伝承されている曲の中にハネ歌と同じ要素が含まれていることを指摘した。このことから、揖斐川町の太鼓踊りの中で梵天・ザイフリをもつ地区は、音楽面においても関連をもつ地域として位置づけることができる。

そのほか、当センターに寄贈された国の選定保存技術「雅楽管楽器製作技術」保持者の故山田全一氏の楽器製作用具について、文化財指定も視野に入れた目録作成に着手し、現在も作業を継続している。

◆関連する執筆

* 2021.8 「揖斐川町の太鼓踊りの音楽様式—綾の踊りの音組織と、ザイフリ・梵天地区にみる音楽の特徴—」『東洋音楽研究』第86号、東洋音楽学会編、pp.45-60。

◆講義・講座等

* 大学院音楽研究科：日本伝統音楽演習 e I・e III、e II・e IV

◆資料調査等

* 2021.10 岐阜県白鳥町にて祭礼関連調査

* 2021.10 山田家寄贈の雅楽器製作用具の目録作成

◆関連する研究助成

* 日本学術振興会科学研究費助成事業 基盤研究(C)「『龍笛要録譜』の研究」(2021年4月～2024年3月予定)

* 一般財団法人カワイサウンド技術・音楽振興財団研究助成「地方における雅楽の伝播と系統に関する研究—飛騨・西濃地方を中心として」(2021年4月～2022年3月)

光平 有希「19世紀～20世紀初頭に刊行された日本表象西洋楽曲の分析」

19世紀初頭から、西洋各国では日本を題材にしたピアノや歌による小品が、一枚刷りの大衆音楽楽譜(シートミュージック sheet music)の形で数多く出版された。これは、ドビュッシー作曲の交響詩《海》やストラヴィンスキー作曲《3つの日本抒情詩》など、有名なジャポニストによる作品に先駆けてのことである。ラジオやレコードが普及する以前、1920年初頭までの最も有力な音楽配信メディアとして機能したシートミュージックにはどのような日本表象の楽曲が存在し、作品発表の裏側にみられる文化的背景はいかなるものなのか、2021年度はこれまで報告者が国内外で調査収集してきたおよそ300点の日本表象シートミュージック(一部、楽曲集を含む)を対象に、各年代にみられる特徴を分析した。

1810～40年代には、ギルドン作曲《日本の調べ》やバイエル作曲《日本の舟歌》など、ピアノ教則本の中で「日本」というタイトルが附されるようになる。その後、1850～70年代は日欧の文化交流を背景に作品が誕生し、大西洋の両岸における日本ブームのさなか、ルコック作曲《茶の花》や《コジキ》などの歌劇が世に出たのもこの頃であった。生まれた歌劇作品の劇中歌は、家庭でも楽しめるよう簡易なピアノ伴奏にアレンジされ、シートミュージックや楽譜集と

なって多数世の中に出回った。1880年代に入ると、西洋を巡回した日本の興行師の姿が、〈日本娘ポルカ〉や〈女興業師ポルカ〉など4分の2拍子の快活な舞曲ポルカで彩られて表象された。また「ミカド」や「タイクーン（大君）」など日本由来の複数の用語が多く、多くの音楽作品に流入し、それらの語を冠した音楽、絵画、さらには日用品さえも登場した。1890年代は、お雇い外国人として滞日した音楽家が作品を生み出すほか、画壇や劇作品のヒットに伴い「ゲイシャ」や「ムスメ」という言葉も定着、日本表象が多様になり始めた時期でもあった。

1900年代に入ると、1904年から翌年にかけて日露戦争に触発された作品が数多く出現した。並行して〈君が代〉や文部省唱歌〈天長節〉などに西洋和声を加えられ、広く流布した。オペラ《蝶々夫人》も1904年に発表され、その余波は、エドワーズ作曲〈蝶々夫人〉やサミュエルズ作曲〈チューチュー（蝶々）さん〉など新たなシートミュージックの誕生にも影響を与えた。1910年代以降は、日本の短歌や俳句が西洋諸語に翻訳されるに伴い、日本の詩歌を表象するものとして「ハイカイ」の語が定着し、その過程では、ジュディット・ゴーチエなどオリエンタリズム、ジャポニスムに精通した文学者たちの影響も大きかった。それらは翻訳詩を歌詞として用いるだけでなく、詩歌から受けた印象を作曲家自らが咀嚼し器楽曲として新たに創造したものもあった。さらに、同時代には日本の地名をタイトルに附したご当地楽曲や、「〇〇さん」のように人名を掲げた作品も多数登場した。しかしながら、音楽メディアが楽譜産業からレコード産業に移行する1920年代初頭を皮切りに、シートミュージックは表舞台から次第に消失、こうした各年代の特徴や変遷が明らかとなった。

◆刊行物

* 2022.3.31 光平有希編著『ポップなジャポニカ、五線譜に舞う—19～20世紀初頭の西洋音楽で描かれた日本』臨川書店、306頁。

◆口頭発表・講座

* 2021.12.7 光平有希「日本をまとう音楽—19世紀～20世紀初頭の西洋大衆音楽作品が描いた『日本』」（大衆文化研究国際ワークショップ・シリーズ講座 IN 北京）

* 2022.1.6 光平有希「19世紀西洋音楽が描く『日本』」（令和3年度 後期 第3回 Online 伝音セミナー）

◆記事

* 2022.2.22 「『蝶々夫人』だけではなかった 音楽のジャポニスム～京都市立芸術大学のセミナーをレポート」（株式会社 hotozero オンラインマガジン：ほとんど0円大学）

◆資料調査

* 東京藝術大学附属図書館、国立国会図書館、国際日本文化研究センター附属図書館での現地調査。

遠藤 美奈「日系社会における仏教音楽（讃仏歌）の伝播と実践に関する研究」

本年度は、ハワイ諸島の浄土真宗を中心とした讃仏歌の移入・定着・発信について新聞等資料をもとにして史実の整理を行った。

1894（明治 27）年、浄土宗がハワイへの開教を皮切りに浄土真宗本願寺派、真宗大谷派、日蓮宗、曹洞宗、真言宗などが次々に追教を本格化させた。讃仏歌の名称は、宗派ごとに「讃歌」「讃徳唱歌」「ヒム」「聖歌」などとも呼んでいる。やがて灌仏会が花まつりとして日本で定着を見せると、移民先にも伝播し、讃仏歌は「頌歌」としてさらに親しまれていったことがわかった。

一般的な説教の場では、個人による歌唱であったが、やがて集団で歌う合唱隊が組成されたことが、本調査で明らかになった。日系新聞『布哇報知』によれば、1918（大正 7）年浄土真宗本願寺派がホノルル別院の移築に伴う開堂式に水干を着用した「讃唱隊」が登場している。一方で、同年、本願寺派内に英語伝道部が設立されると、英語伝道部初代主任の M.T. カービーがアメリカ本土から持参したとみられる P. ケーラスの『Sacred Tunes』（1899）や『Buddhist Hymns』（1911）所収の英語讃仏歌を「讃唱隊」が歌う礼拝を組み立てた。1927（昭和 2）年には次代主任 A. ハントが英語礼拝聖典『Vade Mecum』（1924）を活用し「讃唱隊」による英語讃仏歌を引き継ぐなど、移入の過程がより明確になった。

一方、英語による日系仏教の伝道は、日系移民社会で根付かせるために各宗派が抱えた共通課題であったため、宗教家らは汎太平洋仏教青年大会を計画し、通仏教的な動きを見せ定着の解決策を模索した。1930（昭和 5）年の第 1 回ハワイ大会における音楽に関する事項として（1）仏教音楽研究会の創設、（2）

集会の前後に佛教音楽を研究練習、（3）既成日英讃仏歌中佛青に相当のもの数編を選定することが議論され、青年仏教徒の誰もが歌える環境を整える指針が作られた。これを受け 1932（昭和 7）年にはアメリカ本土初の「聖歌隊」が組成されるなどハワイから組織化が促された。また、「花まつり（4 月 8 日）」と「悟りの会（12 月 8 日）」の開催を仏教青年会の年中行事に定めることで、日系仏教徒が宗派を超えて讃仏歌を愛唱する機会を創出していった。1936（昭和 11）年には、アメリカ本土の 41 の教会に仏教聖歌隊を組織するように北米開教本部から通達がなされ、1 寺院（教会）1 聖歌隊の体制が整えられていった。

このように本山（日本）・ハワイ・アメリカ本土の連関によって、今日に続く熱心な讃仏歌の歌唱へと繋がるのが明らかになってきた。本内容については、「日系移民が歌う仏教音楽—越境のその先：讃仏歌、仏教聖歌、仏教讃歌—」としてまとめる予定である。

なお、本研究は基盤研究（C）「越境する日本の仏教音楽—宗教・文化・精神のグローバル化」（研究代表 GILLAN Matthew :19K00160）の研究分担によるものである。

◆関連する執筆

2022 年 3 月 曲目解説「メロディーの宝宝箱〈聖親鸞〉『めぐみ』257 号、22-23 頁。

◆関連する口頭発表

2021 年 9 月「日系移民が歌う仏教音楽—越境のその先：讃仏歌、仏教聖歌、仏教讃歌—」国際基督教大学宗教音楽センター第 74 回講演会・シンポジウム『越境する日本の仏教音楽』（オンライン開催）

大西 秀紀「近代日本音楽の音声資料に関する研究」

当該年度は最終年度にあたる科研費助成研究「ニッポン、ナショナル、日蓄オリエント各社のディスコグラフィ作成」、および新に開始した科研費助成研究「内外・タイヘイレコードのディスコグラフィ作成」につ

いての研究業務をそれぞれ遂行した。

これらと並行するかたちで当センターの委託研究として、「故井上重夫家旧蔵レコード」のデジタル化作業を担当した。これらは京都市南区久世上久世町在住の井上家が所蔵されていたもので、このたび敷地内の蔵を整理されるに当たり見つけられた 82 枚の SP レコードである。ただ残念なことに割れや欠けなどの破損のため再生できないものがあり、デジタル化ができたのはこれらの内の 66 枚だった。いずれも大正 10 年頃から昭和初期にかけて発売された 10 インチ (25 センチ) 盤で、内容は俚謡、俗曲、新民謡、書生節、浪花節、萬歳、新派劇、映画説明等の大衆芸能がほとんどで、数枚の謡曲やジャズソング、唱歌や演説なども含まれている。レコードの発売時期などから、当時リアルタイムで購入されたものが、そのまま今日まで残ったと考えられる。特徴的なのは破損盤を含む全 82 枚の内、京都に工場があったオリエントレコードが 56 枚あり、続いてニッソーレコードが 7 枚、内外・タイヘイレコードが 5 枚と、ニッポノホンやビクターといった関東系レーベルも見られるものの、大半は関西系レーベルで占められているところが興味深い。いずれにしても、これまで当センターが所蔵している SP レコードとはジャンルを異にするものが多い。これらは大正・昭和初期における庶民の娯楽文化の傾向を知る上で貴重な音声資料で、今回のデジタル化の意義は大きいといえる。

◆関連した執筆

- * 2021.11 「砂川捨丸の SP レコード—府立上方演芸資料館所蔵盤について」『大阪府立上方演芸資料館 令和 2 年年度年報』、大阪府立上方演芸資料館

◆関連した講演

- * 2021.11 「京都のレコード会社 東洋蓄音器 (オリエントレコード) について」『第 94 回 国際 ARC セミナー (Web 配信)』、立命館大学アート・リサーチセンター
- * 2022.3 「音で聴く。砂川捨丸の世界～大阪府立上方演芸資料館 (ワッハ上方) の収蔵資料から～ (対面)」、大阪府立上方演芸資料館

神津 武男「人形浄瑠璃文楽の近世後期上演記録データベース更新に係る追補的資料研究」

本年度の日本伝統音楽研究センターでの活動は、二件の研究費によって、次の二つの課題に取り組んだ。

第一に筆者が研究代表者として 2020 年度以来、科学研究費補助金・基盤研究 (C)、研究課題名「人形浄瑠璃文楽の近世期上演記録データベース更新に係る新出資料調査と公開運用の研究」の採択を得ている。2022 年度までを期間とする。江戸時代・近世期の「人形浄瑠璃文楽」(義太夫節成立以後の人形芝居) の、真に科学的な通史の完成を目指して、資料整備を進めている。筆者は「浄瑠璃本」(通し本。演劇台本・脚本に相当)、「番付」(ポスター・チラシに相当) の二種の史料について、日本国内および海外で悉皆調査を展開してきた。近年新たに所在を把握した未調査機関を中心に実地踏査して、「浄瑠璃本」「番付」各データベースの充実と精度の向上を目指す。新型コロナウイルス感染症「COVID-19」の流行のため昨年度に引き続き計画の大幅な変更を余儀なくされたが、次に掲げる機関について資料調査を進めた。〈1〉浄瑠璃本 (神戸女子大学古典芸能研究センター志水文庫・長野市立博物館・鳴門市史編纂室・南あわじ市淡路人形浄瑠璃資料館鶴澤友路師旧蔵資料)、〈2〉浄瑠璃番付 (大阪府立中央図書館・京都府立京都学歴彩館)。鳥越文蔵氏の御高配を得て『義太夫年表近世篇』刊行会が収集した浄瑠璃番付および浄瑠璃絵尽の写真を前年度にデジタル画像化したが、本年度には「番付」データベースへ登録することを進めた。このほかに石川県金沢市に所在する人形浄瑠璃関係の墓碑調査を行なった。

第二に筆者が研究分担者として参画するところの、科研費・基盤研究 (B)、研究課題名「新出コレクション「西村公一文庫」の目録作成と江戸時代の日本伝統音楽の資料学的研究」(研究代表者は竹内有一氏) が 2020 年度に採択された。2023 年度までを期間とする。「西村公一文庫」は、西村公一氏 (大阪府豊中市) が収集した日本伝統音楽に関する新出コレクショ

ンである。事前の調査では同文庫は四千点を超えると思われ、京都・大阪を中心とする文化圏における日本伝統音楽の資料群としては、随一の点数を誇るコレクションである。当該研究課題は、その目録化を第一歩として同文庫を学界へ紹介し、同文庫の全貌を総合的に分析し、日本伝統音楽の資料学的研究に資することを旨とする。筆者は浄瑠璃本の整理を担当し、通し本について詳細な書誌調査を行なった。西村氏の収集はいまも継続中で、2017年度末の時点では527点と数えた（科学研究費補助金・研究活動スタート支援、研究課題名「人形浄瑠璃文楽の近世後期上演記録データベース更新に係る追補的資料研究」16H07120研究成果報告書）が、2021年度までに寄託された分は、641点と数えるに至った。

浄瑠璃番付の所在調査・書誌研究の成果として、人形浄瑠璃文楽という芸能の名称の由来である人物・初代文楽の伝記について、(1)の論文にまとめた。初代文楽は、素人の義太夫節の太夫・稽古人であったひとと伝わるが、素人は俳名を名乗る慣習があって、俳名「文楽」を名乗ったことを明らかにした。また同人の後裔が植村と改姓したのは明治期とされ、同家は江戸時代には正井姓であったことから、初代文楽を「植村文楽軒」と呼ぶことは時代錯誤であることを指摘した。

初代文楽の妻てるや子らが大阪稻荷社内東芝居の芝居茶屋の経営に乗り出した年は、『摂陽奇観』の所説に従い、文化8年とされているが、同芝居の番付に「文楽茶店」の取り扱い印が確認され始める、文政元年まで遅れることを指摘した。大坂の宮地には素人の太夫らが出演する「稽古場」と呼ばれる施設がいくつかあり、選抜されて道頓堀の竹本・豊竹両本家へプロとして登用するシステムがあったことを確認した上で、『摂津名所図会』の描く稲荷社内の劇場と表茶屋は寛政期当時の「稽古場」であって、文化8年に人形浄瑠璃の劇場へと運用が改まり、さらにのち「文楽茶店」が文政元年から芝居茶屋を経営したものと推定した。

◆関連する執筆

* (1)「同時代史料から考える初代文楽と「文楽の芝居」について ―初代文楽を「植村文楽軒」と呼ぶことは誤りで

あること―」（『歴史の里』第25号、松茂町歴史民俗資料館・人形浄瑠璃芝居資料館、2022年3月所収）。

高橋 葉子 「〈羽衣〉囃子総譜の解説と音曲伝書を通じた技法研究」

1. プロジェクト研究「音曲技法書（伝書）の総合的研究」（代表藤田隆則）

プロジェクトの専門部会の一つである、能の映像に添える楽譜制作の研究成果として、「能〈羽衣〉楽譜付」（藤田隆則ほか編著）のウェブサイト公開と、『能〈羽衣〉を解剖する一音曲面を中心に』（藤田隆則編、日本伝統音楽研究センター研究報告14）を出版した。成果物には、〈羽衣〉の作品解説のほか、一曲すべての謡の横線譜、囃子方全パートの総譜、シテ・ワキの型付等が記され、ウェブ上で、映像と同時進行で総譜を一クサリ（8拍）ごとに見ることができる、画期的な内容である。報告者は、囃子の総譜制作と一クサリごとの注釈、および太鼓の役割と特徴について執筆したが、総譜の注釈においては、演者同士が何に留意し、どのようにアンサンブルを成立させているかという、楽譜の外見からは読み取ることが困難な内的構造を中心に、能の音楽における拍の決定と伝達のシステムを解説した。

プロジェクトのもう一つの部会である、謡伝書『謡鏡』の輪読研究においては、同書が、「永正元年観世道見在判伝書」（以下「道見在判伝書」）の記事を取り入れ、かつ独自に咀嚼している点など、同書の成立と系統の問題として注目すべきであることを指摘した。「道見在判伝書」は、報告者が科研費研究（次項）において調査を行っている伝書で、従来あまり顧みられることのなかった資料だが、呂律の概念を、一般的な能の音曲伝書のそれとは逆に呂＝愁い、律＝祝言、と解釈するなど、独特な記事が多く、引用曲にも古色が特徴的である。能の音楽における呂律は、ヨワ吟・ツヨ吟の概念とその分化にも関わる問題であり、その点からも、室町末期音曲伝書の一系統として分析し、位置付けをする必要があると考える。『謡鏡』との関係も探ってゆきたい。

2. 科研費研究「謡伝書用語の体系的研究—演奏の理念と表現を中心に」

前項で触れた「道見在判伝書」の異本調査を行い、その結果、既知の東北大学蔵本以外にも福王流江崎家や伊藤正義文庫などに伝本が存在し、また貞享年間には版本（但し道見の名前を削除）が出版されるなど、ある程度流布していたことがわかった。同書の一部の記事に対しては、後代の観世宗節系伝書の改変と見る向きもあるが、内容的に宗節以前の別の理論と考えるのが妥当である。これらの問題点を含め、次年度に翻刻解題を発表したい。

本研究は、音曲用語索引の準備を目的の一つとしているが、21年度には具体的に進展させられなかった。次年度には、『八帖花伝書』『音曲玉淵集』『道見在判伝書』など索引のない伝書について、ウェブサイトでのデータ公開によって検索の便宜を供したい。なお、関連する研究として、「浅野太左衛門家旧蔵資料の総合的研究」（成城大学民俗学研究所共同研究事業、研究代表者大谷節子）において、報告者は主に囃子伝書の解題を担当した。浅野家旧蔵の囃子伝書には、現在は廃絶し実態のほとんど知られない葛野流小鼓の手付や、早笛の古形をとどめる平岩流唱歌付、現在は太鼓無しで演奏される〈忠信〉〈木曾〉の太鼓手付など、希少な資料が伝わっている。研究の成果物として資料解題目録（『謡の家の軌跡—浅野太左衛門家基礎資料集成』）を出版した。

◆関連する執筆

- * 2021.6 共著『『謡秘伝鈔』の翻刻一付、鴻山文庫本『音曲袖珍宝』との校異』謡秘伝鈔研究会（代表樹下文隆）研究報告『神戸女子大学古典芸能研究センター紀要』15号
- * 2022.3 共著『能「羽衣」を解剖する—音曲面を中心に』藤田隆則編、日本伝統音楽研究センター研究報告14
- * 2022.3 共著『謡の家の軌跡—浅野太左衛門家基礎資料集成』大谷節子編著、和泉書院
- * 2021.5 書籍紹介「武蔵野大学能楽資料センター編『能・狂言の音声ガイド・字幕に関する研究序説—上質のコンテンツ制作のための方法論の確立と情報の蓄積・共有化に向けた基礎整備への試み』『楽劇学』第28号

◆関連する口頭発表

- * 2022.3「蘭曲が能にもたらしたもの」第20回能楽学会大会「能と謡文化」企画報告
- * 2022.3「浅野文庫の囃子伝書」能楽学会第33回能楽フォーラム「謡の家の軌跡」

◆口頭解説

- * 2021.5「隅田川の語」伝音センター第57回公開講座 能楽演奏会〈其ノ一〉「ワキ方下掛宝生流×小鼓方大倉流」
- * 2021.11「大鼓一調『勸進帳』を聞く」伝音センター第58回公開講座 能楽演奏会〈其ノ二〉「シテ方金剛流×大鼓方石井流」

◆関連する対外活動

- * 日本芸術文化振興会 芸術文化振興基金運営委員会 伝統芸能・大衆芸能専門委員会委員
- * 武蔵野大学能楽資料センター非常勤研究員

◆助成事業に基づく研究

科学研究費 助成事業基盤研究(C) 20K00131 研究課題「謡伝書用語の体系的研究—演奏の理念と表現を中心に」研究代表者

多田 純一「近代日本における西洋音楽受容と演奏様式および形態に関する研究」

本研究は科学研究費「ショパン作品の演奏におけるヴァリエーションの選択と即興的表現の研究」（20K00244）を基盤としつつ、近代日本における西洋音楽受容を考察するために、明治期から昭和初期におけるショパンの作品の演奏、ショパンの作品を積極的に演奏したピアニストの音楽活動、日本に現存するショパンの手稿譜についても調査対象とする。

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響により、2020年10月開催予定であった第18回ショパン国際ピアノ・コンクール 18th International Fryderyk Chopin Piano Competition は2021年10月に（The Fryderyk Chopin Institute, 3-20 October 2021, Warsaw: Warsaw Philharmonic Concert Hall）、2021年国際ショパン学術会議 International Chopinological Congress 2021, 'Through the Prism of Chopin: Reimagining the 19th Century' は2021年12月に延期され（The Fryderyk Chopin Institute, 1-4 December 2021, Warsaw: Conference Centre Copernicus Science Centre）、研究計画の予定に遅れが生じたが、いずれも延期された日程通りに現地開催された。

第18回ショパン国際ピアノ・コンクールでは、研究代表者である多田と科研費・研究協力者である岡部玲子が現地調査を行った。この調査研究の成果は来年

度に発表する予定である。

2021年国際ショパン学術会議では、研究代表者である多田が'Musical Activities of the First Japanese 'Chopin Pianist' Ryūkichi Sawada (1886-1936): Focusing on *Chouwa-gaku* (Harmonized Music)' (「日本人最初の「ショパン弾き」澤田柳吉(1886-1936)の音楽活動―「調和楽」に焦点を充てて―)、科研費・研究協力者である武田幸子が'The Acquisition of a 19th-Century Manuscript and Its Import to Japan: *Stichvorlage* Copy of Mazurka C major Op.33 No.2' (19世紀手稿譜の日本への伝来―マズルカ 八長調 作品33の2 製版用筆写譜―)について、英語で口頭発表を行った。いずれも近代日本における西洋音楽受容、とりわけショパン受容を考察するための一例として提示した。

◆著作活動

- * 2022.01 監修 コミック版世界の伝記『ショパン』ポプラ社、126 pp. (迎夏生(漫画)、多田は全ページを監修)
- * 2023.03 共著論文「幼稚園における「モデル・パターン」方式を用いた歌唱指導の実践と考察―保育所および幼保連携型認定こども園における実践を視野に入れて―」大阪芸術大学短期大学部『紀要』第46号、pp.39～52 (2022年3月20日) (紺谷志野との共著)

◆口述活動

- * 2021.12 03 学会発表 'Musical Activities of the First Japanese 'Chopin Pianist' Ryūkichi Sawada (1886-1936): Focusing on *Chouwa-gaku* (Harmonized Music)' (「日本人最初の「ショパン弾き」澤田柳吉(1886-1936)の音楽活動―「調和楽」に焦点を充てて―) International Chopinological Congress 2021, 'Through the Prism of Chopin: Reimagining the 19th Century' (2021年国際ショパン学術会議), The Fryderyk Chopin Institute, Warsaw: Conference Centre Copernicus Science Centre (2021年12月3日)
- * 2021.11 18 ゲスト出演「第18回ショパン国際ピアノ・コンクールと日本におけるショパン受容」(OTTAVA Fresca、パーソナリティ:長井進之介) インターネットラジオ OTTAVA 放送(2021年11月18日午前11時より)
- * 2022.03 25 ゲスト出演「日本におけるショパン受容と澤田柳吉」(OTTAVA Fresca、パーソナリティ:長井進之介) インターネットラジオ OTTAVA 放送(2022年03月25日午前11時より)

◆調査・取材活動

- * 近代日本における西洋音楽受容と演奏様式および形態に関する研究
- * 第18回ショパン国際ピアノ・コンクール現地調査(2021年10月3日～20日)

*所属学会 日本音楽学会、日本音楽表現学会、日本音楽教育学会、音楽教育史学

丹羽 幸江「室町期の謡の旋律法の研究と能の復曲活動」

1、「創生期の能の音楽における歌詞の伝達に適した旋律法」の研究

2018年度より開始した研究課題「創生期の能の音楽における歌詞の伝達に適した旋律法」(科学研究費基盤C、2018～2022年度予定)を引き続き取り組んでいる。能は日本で初めての本格的な劇場芸術であり、物語を伝える謡に工夫が凝らされている。それは具体的にどのように始まったのかという問いのもと、3年度には能の先行芸能である早歌から何を継承し、何を独自に作り出したのかを中心に据えた。

まず論文「能の旋律のパターンの由来と早歌」では、能の謡での旋律は七五調と連動して、上ノ句と下ノ句とで旋律の動き方がパターン化されている。その由来を鎌倉時代の先行芸能、早歌から探った。早歌で用いられていた旋律パターンは多様であり、それを取捨選択する形で能の旋律パターンが成立したことを論じた。

つぎに論文「世阿弥自筆譜における胡麻への早歌からの影響」では、楽譜の記し方はどの程度、早歌の影響を受けたのかを考察した。能の楽譜は「胡麻」という基礎となる音符によって音節を記すが、世阿弥の自筆譜ではまだ現在のような胡麻の種類に落ち着いておらず、早歌の影響から五声の徴の音位を表す胡麻を摂取していたことを指摘し、謡が独自の記譜法を獲得するまでの過程の一端を明らかにした。

さらに研究発表「世阿弥自筆譜《江口》『サウカフシ』への早歌真曲抄《対揚》の影響」では、世阿弥の自筆譜《江口》の一セイ部分は自筆譜の解釈によっては拍子合で装飾音を多用する、まさに早歌のような音楽性をもつ部分であった可能性を指摘した。

2、能の復曲活動

現在演じられなくなった能を復活することを復曲

というが、観世流梅若研能会所属の能楽師加藤眞悟氏とともに復曲活動を行ってきた。令和3年度には、前年度に復曲した《和田酒盛》が名古屋能楽堂において再演された。令和4年度にはあらたに《大磯》と《不逢森》を復曲上演する予定であるため、音楽面担当として現在、古い謡本の節付けの照合作業を行っている。

◆関連する執筆

- * 2021.9 「能の旋律のパターンの由来と早歌」 京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター紀要、第18号
- * 2022.3 「世阿弥自筆譜における胡麻への早歌からの影響」 昭和音楽大学研究紀要第41号
- * 2022.3 「羽衣からみた江戸時代までの謡の記譜法の変遷」、「謡の旋律とは?」、藤田隆則編『能〈羽衣〉を解剖する—音曲面を中心に』 京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター
- * 2022.2 「復曲能 和田酒盛 信長公が最後に観たもの」 能楽書林、『能楽タイムズ』839号。

◆関連する口頭発表

- * 2021.11 「世阿弥自筆譜〈江口〉『サウカフシ』への早歌真曲抄〈対揚〉の影響」、東洋音楽学会第72回全国大会、オンライン開催。
- * 2021.12 「復曲能『和田酒盛』の見どころ」、復曲能を観る会名古屋公演「信長公が最後に観た物」、名古屋能楽堂。

平間 充子「古代の宮廷音楽に関する日中比較—日本の内教坊の活動とレパートリーを中心に—」

内教坊（ないきょうぼう）は、唐代に設置された女性演奏家のみで構成される宮廷の奏楽機関であり、それに倣い日本でも8世紀の前半に同名の機関が発足したとされている。日本の内教坊が舞楽を演奏していた儀礼として、所謂内宴と菊花宴の二つを分析した昨年度に引き続き、本年度は正月七日白馬節会へも対象を広げ、さらに音楽史や歴史学の先行研究を参照しつつ唐代の内教坊、および日中それぞれの宮廷における儀礼音楽や女性の政治的役割について比較・考察を行った。使用する文献資料は六国史などの正史、『江家次第』などの儀式書、『教訓抄』『統教訓鈔』などの楽書、また中国の正史、『教坊記』、『通典』『唐会要』などである。

具体的には、日本の内教坊の活動とレパートリーの

楽曲を分析し、中国西域起源の曲調を取り入れていた可能性と、そのひとつである舞楽《玉樹後庭花》の日中における実態と認識、とりわけ中国では房中楽とされていたことについて検証した結果、平安初期における内教坊の奏楽が中国のそれに近い性格を持ち、天皇の私的な側面と強く結びついていたと判断できる。

一方、中国古代の女性演奏家は、家臣の身分や皇帝との関係性によって下賜されたことが榎本淳一氏により指摘されている。いわゆる女楽が中国の宮廷で持っていた皇帝と臣下・また臣下どうしを差別化する機能が、なぜ日本では定着しなかったのかについて、内教坊や内教坊が奉仕する儀礼の成立・展開過程と併せ考察した結果、古代日本における女性の政治的地位が中国からの律令制導入に伴って低下し、かつ政治的役割から排除される傾向と合致していること、すなわち日中それぞれの支配構造とその原理の違いが反映されている可能性を指摘した。

大陸から日本へ移入された音楽は単に模倣されたのではなく、とりわけ儀礼音楽に関しては日本の社会的状況や政治的な背景と整合させつつ独自の発展を遂げていた。本研究は、音楽演奏のみならず奏楽機関としての性格や女性の社会的地位までも含めて分析することによって、女性による音楽演奏が当時の日中の支配者層におけるジェンダー差異を反映している可能性を指摘し、さらに文献・記録類を音楽研究に用いることによって、音楽文化の伝播・発展の問題に新たな視点を提示しうるものであろう。

関連する口頭発表

- * 2021.11 「平安時代の女性演奏家集団に見える日中支配者層のジェンダー差異：日本の内教坊とその活動を中心に」 日本音楽学会第72回全国大会、信州大学松本キャンパスおよびZoom
- * 2021.11 「古代日本の儀礼と音楽・芸能—内教坊を中心に—」 前近代女性史研究会第108回例会、専修大学神田キャンパス

福本 康之「声明および賛美歌との関係から見る近現代日本仏教界における洋楽受容の実態」

従来の研究では、仏教洋楽そのものに焦点を当ててきたが、本研究では、関連領域である声明や賛美歌といった、同じ宗教音楽との関係から仏教洋楽の受容について読み解くことを目的とした。

そのため初年度である本年は、まず洋楽の受容が盛んである浄土系教団（浄土宗および真宗十派）の声明側の資料（声明集および『中外日報』などの宗教専門誌）の調査・収集を中心に行った。それらの資料から、現段階で確認できたこととしては、仏教界で洋楽受容がはじまった近代以降に、伝統的な声明について比較的大きな改譜および新譜の創作が指摘される。まだ全宗派での調査を終えていないので、浄土系教団全体での割合は明らかではないが、少なくともないと推察される。また、そのことが仏教の歴史においてどれほどの意味を持つものか、洋楽の受容とどれほど関わりのあるものかは、さらに調査を進める必要がある（声明と洋楽による讃歌を巡る議論などは、前述の専門紙上などでも確認される）と考える。

次に現時点で興味深いこととしては、本来儀式での読経のための声明譜を記した経本（声明集）の類に、比較的早い段階から五線譜によって書かれた洋楽スタイルの讃歌（主に宗派の公式歌や行事関連の歌など）が掲載されている事実である。宗派によっては、現在の経本に、洋楽で書かれた法要音楽が記載されいたり、加えて伝統的な声明に対しても博士の他に五線譜を模した譜が掲載されるなど、明らかに洋楽の影響が見て取れる事象が確認された。こうした資料からも、明治以降の声明と洋楽が、影響関係にあったことが窺える。この点については今年度、より多くの声明集に関して調査を進め、年代順に追うことができればと考えている。

対して、賛美歌と仏教洋楽の関連については、明治の前半にこそ「賛美歌の影響を受けた仏教界での洋楽受容」という資料は散見されるもの、相互影響的な内容を時代を追って読み解くための資料は、現時点にお

いてまだまだ質、量ともに不十分な状況にある。

以上2点について、次年度は、「宗派」という同じフィールドにある、「仏教洋楽」と「声明や雅楽」の関連を念頭に、さらなる資料調査をもとに研究を深めるなかで、関連資料についての整理と報告、そして歴史的な両者の関係の変遷について報告できればと考えている。

上野 正章「近代日本における古典音楽の独学についての比較研究——雅楽と謡曲を中心に」

1. 個人研究

「明治後期における直シ入り謡本の普及について 丸岡桂の仕事を中心に」（『東洋音楽研究』（85）所収）を足がかりに、謡曲教授における真正性オーセンティシティの問題に取り組んだ。また、謡曲雑誌等に見出される謡曲稽古体験記の調査を行った。

2. 共同研究

a. 2021年度プロジェクト研究「音曲技法書（伝書）の総合的研究」（研究代表者：藤田隆則）に関して

2月27日から3月1日にかけて、高知城歴史博物館が所蔵する『謡鏡』の原本を調査し、閲覧・撮影した。また、同書の綴目近くに書き記された文字や、書き損じを訂正した箇所を確認した。その他、オーテピア高知図書館にて『謡鏡』関連資料を調査し、閲覧・複写した。

b. 2021年度共同研究「様式分化をとげた雅楽を対象とする伝承実態調査」（研究代表者：田鍬智志）に関して

『日本の民俗芸能調査報告書集成』三隅治雄、大島暁雄、吉田純子編、海路書院、2004-2008年を調査し、各地で行われている雅楽の実態を把握した。『九州地方の民俗芸能 1 福岡・佐賀』、『九州地方の民俗芸能 3 大分・宮崎』、『補遺 1 山梨・山口の民俗芸能』を担当した。

◆関連した執筆

* 2022.3 論文「羽衣の謡本の歴史—明治以降の羽衣の謡本」『日本伝統音楽研究センター研究報告 14 能「羽衣」

を解剖する 『音曲面を中心に』 (藤田隆則編、京都市立
芸術大学日本伝統音楽研究センター)